



# 館長だより

山形県産業科学館

令和7年10月11日(土)

発行 館長 加藤 智一

## 「無用の用」——役に立たぬものの深き役立ち

2025年のノーベル化学賞が10月8日に発表になりました。授賞したのは北川進 京都大学特別教授(74)です。北川先生は、90年代に、内部に微小空間が規則正しく並んだジャングルジムのような「金属有機構造体」と呼ばれる「多孔性材料」を合成することに成功しました。この物質は、穴の大きさを自由に変えられる柔軟性が最大の特徴で、CO<sub>2</sub>とかPFASとか水素とか、特定の気体を出し入れできます。その北川先生が会見で語った言葉に、「無用の用」という言葉がありました。

この言葉の出典は、中国戦国時代の思想家・荘子(そうし)が著した「荘子」の一篇「人間世(じんかんせい)」にあります。「人皆知有用之用、而莫知無用之用也(人は皆、有用の用を知れども、無用の用を知るなし)」という一節がそれです。現代語訳すれば、「人は誰しも、役に立つものが役立つことは知っているが、役に立たないものが役立つことは知らない」となります。一見、逆説的で混乱を招くような表現ですが、荘子の思想においては、これは極めて本質的な洞察です。荘子は、実利や効率を追い求める人間の価値観に対して、自然の摂理や無為自然の思想を重んじました。彼にとって「無用」とは、単に役に立たないという意味ではなく、人間の狭い価値判断では測れない、より大きな存在意義を持つものでした。

この思想は、同じく道家の祖とされる老子にも通じます。老子の「道德経」には、「三十輻共一轂、当其無、有車之用(三十の輻は一つの轂に集まり、その無に当たりて車の用あり)」という記述があります。これは、車輪の中心にある空洞があるからこそ、車輪として機能するという意味です。器の中の空間、家の中の空間も同様に、形のない「無」があるからこそ、形あるものが役割を果たすという逆説を説いています。

このように「無用の用」は、道家思想における「無」の価値を象徴する言葉です。人間の目には無駄に見えるもの、役に立たないと思われるものが、実は根源的な価値を持っているという視点は、現代の社会にも深い示唆を与えるものです。

例えば、都市開発において「空き地」はしばしば無駄な場所とされますが、その空間があることで風

通しが良くなり、災害時の避難場所となり、地域の生態系を支える役割を果たすこともあるのではないのでしょうか。また、教育においても、すぐに役立つ知識ばかりを追い求める風潮がありますが、哲学や文学、芸術といった「無用」に見える学問が、人間の精神を豊かにし、社会の深層を支えていることは言うまでもありません。

さらに、個人の生き方においても「無用の用」は重要な視点を提供するものです。効率や成果ばかりを重視する現代において、趣味や余暇、何気ない会話や散歩といった「役に立たない時間」が、実は心の安定や創造性の源泉となっているのです。人間は機械ではありません。無駄に見えるものの中にこそ、人間らしさが宿るのです。

荘子は、斧で切られることのない大木の話を通じて「無用の用」を説きました。材木としては使えないが、だからこそ長く生き、鳥や人が憩う場となっている。その木は「無用」であるがゆえに「用」がある。これは、社会の中で「役に立たない」とされる人や物にも、別の次元での価値があることを示しています。効率や成果だけでは測れない価値、目に見えない貢献、そして余白の力。それらを認めることが、より持続可能で豊かな社会を築く鍵となることでしょう。

「無用の用」とは、単なる逆説ではありません。それは、私たちの価値観を問い直し、見えないものの意味を見つめ直す哲学的な眼差しです。荘子や老子が説いたこの思想は、現代においてこそ、より深く響くのではないのでしょうか。北川氏は、読書体験を通じて「何もないものにも意味がある」という見方に大きな影響を受けたと話しています。「穴と考えると無用なのですが、その穴に原子や分子を入れ、ためたり変えたりしていくと役に立つのです。」この言葉は、何か新しい発想のヒントを私たちに与えてくれている気がしてなりません。

